

Our Fatherless World

—Lawrence における父と子の課題—

平井雅子

Lawrence 文学における＜父と子＞のテーマは従来、あまり論じられて来なかったが、今回これを取り上げてみて、それが予想以上に複雑で重要な問題であることに気づいた。この小論においては、その全てをあらうことは出来ないが、取り敢えず *Women in Love* までの Lawrence の主な小説にどのような父親像が登場するかを検討することから始めて、“England, My England” という短篇を中心に、Father の概念のあいまいさを論じてみよう。幾重にも屈折し、多様に展開される、その複雑な構造を明らかにするために。

Lawrence 文学において＜父と子＞の関係が、＜母と子＞の関係ほど脚光を浴びて来なかった原因として、*Sons and Lovers* の Paul Morel とその母に象徴される＜母と息子＞の密着した関係への伝記的興味があまりに強く、その蔭にある父親の存在が見すごされがちであったことが考えられる。実際、この自叙伝的小説の中に登場する父親は、酒呑みで無責任で、家族全体から批判され軽蔑される一種の部外者ですらある。とは言え、この父親は家族に対し全く無責任な訳ではなく、多くの炭坑夫と同様に家族のパン代をかせぎ、暗く熱い炭坑内の労働の後の楽しみを酒場に求めていたとも言えるのであって、そのような彼が、より高い倫理性と価値観をもった妻 Mrs. Morel を取り巻く＜家庭＞という世界からはじき出されている姿は一種、哀れですらある。欠点だらけで、家族に馬鹿にされると言ってはどなり散らし、しばしば小心で卑怯な面すら見せるこの父親に対し、なお読者が憎みきれず、どこか切ないような気持を感じるとしたら、それは一つには彼の温かみのある生き生きとした人間性のせいであろう。さらに、死の危険と隣合わせに毎日、炭坑にもぐってゆく泥にまみれた男のヒロイズムも、かすかながら匂ってくる。もっとも、息子 Paul が炭坑夫としての父親に心ひかれる気持は、直接、表れる訳ではない。それは、少年 Paul と他の子供達が、父親が寝しずまってから、外の道を通る炭坑夫達の足音にベッドの中で耳をすましたり、時には窓辺から、次第に小さくなっていく坑夫達のランプの影が闇の中へと吸いこまれるのを見守ったりすることにみられるように、現実の父親の姿が消えた時に、言わば＜父親の影＞のようなものに引かれる、というあいまいな形で表れる。その底にあるのは、ひょっとすると見過されがちな、半ば無意識、潜在的な父親への憧れである。しかし、それは意識的には強く反発している父親自身に向けられるよりも、その代償としての炭坑夫のイメージの中に純粋化され、美化されて求められるとも言えるかも知れない。こうした屈折の背後にあるものを、Mr. Morel が炭坑内で重傷を負った時の Mrs. Morel の反応が暗示している。

She was grieved, and bitterly sorry for the man who was hurt so much.

But still, in her heart of hearts, where the love should have burned, there was a blank. . . . It hurt her most of all, this failure to love him, even when he roused her strong emotions. (*Sons and Lovers*, p.110)¹

いかに Mr. Morel の哀れさ（時には魅力）を感じさせる場面であっても、その根本にあるべき重要な＜夫＞として、＜父親＞としてのつながりが欠如していること、“blank”（不在）なること、そのことの痛みがここに感じられる。これは、母親の想いをわが想いとして察するに敏であり、その痛みを分とうと懸命に努力してきた Paul の想いであり、Lawrence の想いであつたと考えられる。

父親の不在——これは処女作 *The White Peacock* においては、さらに極端な形で現れている。主人公 Cyril, Lettie 兄妹の父親は、彼らが物心つく以前に家を飛び出し、酒と女に走った官能的で無責任な父親であり、その後、心身共に病み、半ば狂人のような姿で Cyril の前に現れる時以外は、死ぬまで家族の前に姿を見せることはない。しかも、その唯一の出会いの時ですら、Cyril は森の中で出くわした奇妙な侵入者を、自分の父親と気付かずに別れてしまう。そして、あたかも家族への無責任さの報いであるかのように、父親は一人、淋しく死んでゆき、知らせを受けてやって来た Cyril と母親も、彼の最期に立会うことは出来なかった。その後、Cyril の前に出現する男っぽく虚無的な森番 Annable は、確かに Cyril にとって父親的存在であり、*Lady Chatterley's Lover* の森番 Mellors の原型としても重要であるが、ここではただ、Annable もまた石切り場での謎めいた事故によって、あっけなく命を落とすということ、そして彼が人生に何ら積極的意味を見出せない虚無論者であつたことを指摘するにとどめたい。なぜ父親像が、Annable という父親以外の人物の中に求められねばならなかったか、その事の意味については、さらに別稿で詳しく論じたいと思っている。いずれにせよ、この処女作に始まって Lawrence の作品には、父親の不在感、死の影が濃厚に感じられる。

さて、その後の作品の中にも、強い存在感をもった現実の父親は登場しないのだろうか。そのような魅力ある人間の代表として、例えば、*The Rainbow* における Tom Brangwen が考えられよう。Marsh という恵み豊かな湿地に根をおろした Brangwen の男達の肉体、その肉体を流れる熱く重たい血のリズムは、Tom Brangwen の魅力そのものであり、未知の世界へ、外国人へ、精神的価値へと憧れながら鈍重な理性の眠りを脱しきれない彼の苦しみは、肉体そのものを引きちぎろうとするかのような実感をもっている。しかもなお、Mr. Morel の中に時折、見られた知的ではないが温かく陽気なユーモアは、Tom の中で黄金に輝いている。このように一個の人間として、男として、あるいは mating male としては豊かな存在感をもつ Tom だが、父親としてみれば、確固たる価値観を子らに示してやれず、自分自身が不安定な空虚な内面を擁している、という否定的側面が強いように思われる。妻 Lydia が愛した若々しい Tom の肉体を超えては、彼には時代の変化や老いの力、さらには自然の猛威に抗する術もなく、突然、襲った洪水に吞まれて彼が死んでしまうという事件そのものが、この事を物語っているのではあるまいか。折しも彼は、内心の弱さを秘めた Mr. Morel や Cyril

の父親と呼応するように酔っぱらっており、馬に乗って豪雨の中をつつ走りながら、押し流されてゆく道路上の炭がら(人が歩きやすくするために湿地の道路に置いておいたもの)を見ても、

I don't see why I should concern myself. Thy can wash to kingdomcome and back again for what I care. I suppose they should be washed back again some day. That's how things are. (*The Rainbow* p.245)²

という、無責任な楽天主義を高唱し、習慣的動作と子供っぽい強がりだけに頼って、膝まで水につかりながら、いつも通りに馬を馬小屋に入れようとする。さらには、たずさえたランプの下の僅かな明るさを除いては一寸先も見えない闇夜の豪音にすい寄せられるように、彼の膝を巻きこみ押し流そうとする驚くべき渦の中心へと、ことさらに踏みこんでゆく。

He *had* to go and look for where it came from... (*The Rainbow*, p. 246)

思わず知らず死へと引き寄せられながら、その事に気付きもせず、全てを“amusing”な遊びとしてしか扱えられない彼の幼稚さは致命的であり、この場面の直前に、同じ夜、家で独り悩み、生きる意味も目標も見出せずにいる息子 Fred Brangwen の姿が描かれていることは意味深い。

This wet black night seemed to cut him off and make him unsettled, aware of himself, aware that he wanted something else, aware that he was scarecely living. There seemed to him to be no root to his life, no place for him to be satisfied in. . . . He wanted change, deep, vital change of living.

And he did not know how to get it. (*The Rainbow*, p. 243)

自らを生きていないと感じ、今の生活から脱け出したいと苛立っている息子にとって、幼稚なままに今までの生き方にしがみついている Tom は、父親としての失格者でもあり、同時に否定すべき、精神的に殺すべき相手でもある。土地に結びついて生きる Tom の魅力は、同時に息子にとっては、父親の不在感と、父親に対する無意識の殺意を抱かせるものであったとも言えないだろうか。そして父親自身、見えざる殺人者の手に、あるいは好んで身を委ねていったかのようである。

このような父と息子の ambivalent な関係は、*Women in Love* の Gerald Crich と、その父親の無言の確執の中に、まさに容赦なき残酷さで描かれている。と言うより、父親 Mr. Crich が病氣のために死んでゆく姿——信じられぬほどゆっくりと、最後まで屈せず死を認めずに死んでゆく姿——を見守る Gerald が、なぜ異常なまでに深刻に、これを自分の死のごとく体験しなければならぬのか。また、幼い頃 Gerald が銃で遊んでいて弟を殺してしまったという事故の背後に彼の“unconscious will”が働いていたと、なぜ Ursula Brangwen は執拗に主張するのか。同時に Ursula は、この時、裸で水に飛びこむ“diver”としての Gerald の姿を Gudrun と共に眺めながら、新しい時代の炭鉱主として父親の仕事を引き継ぎ合理化した Gerald の意志に思いを馳せ、なぜ、次のように予言しなければならないのか。

He'll have to die soon, when he's made every possible improvement, and there will be nothing more to improve, He's got to go, anyhow. (*Women in*

そして事実、Gerald は、その温厚で慈善家の父親 Mr. Crich の炭鉱経営が、いかに時代遅れで、権利としての物欲にめざめつつある労働者に対する欺瞞にすぎないか、いかに経営を傾かせ、労働者の活力を奪い、Mr. Crich の慈善にすがる卑しく弱い心だけを引きつけているか、に反発して徹底した合理化を断行するが、その結果、父親の死後、自分の中に口を開いた恐しい虚無を埋めることが出来ずに Alps の雪の中に身を沈めることとなる。このように、単に殺したい、殺されたい、という単純な欲求ではなく、殺人者が同時に被害者でもあり自殺者でもあるという ambivalent な関係は、*The Rainbow* における Tom の魅力が、同時に息子にとって父親の不在感と、父親に対する殺意を抱かせるものであった、という解釈をあてはめることによって、その意味を、より鮮明にする。Tom の息子 Fred が、自分の今の生き方から、Marsh の土地から逃れたいと焦っても、そこを離れて生きる場をもたないこと。誰にとめられている訳でもないのに、そこに縛りつけられている、という状態。それは、彼が意識するとしないと関わらず、なお父親が強く息子を引きつけている、という矛盾を物語っている。Fred の深部に根をはるのは父親の存在であり、その老いた根を断つことは自らの根を断つこと、死を意味するというジレンマを一步、進めれば、それは Gerald の合理主義、父親殺し、自らの死へとつながるだろう。すなわち、一見、さして魅力的でもなく、むしろ全面的に否定したくなるような欺瞞的存在として描かれる父親 Mr. Crich の優しさだが、実は、その反発をかきたてる描写の蔭に Gerald にとって、さらに Lawrence にとっての根深い魅力が隠されていると見るべきだろう。Mr. Crich の優しさは、自己と他者、家族と他人を区別せず、全ての物を人々と分ち合わねばならない、とするキリスト教の理想の実践にあり、物質文明にとっぷりつかった世界の中で、それは甚しい時代錯誤、現実認識のゆがみ、欺瞞であると同時に、そうと知れつつ、なお断ちがたい郷愁を誘う人類の夢である。さればこそ、Mr. Crich の優しさは、真綿で首をしめるように Mrs. Crich の野性的気性を閉じこめたのであり、息子 Gerald にとっても、陰湿だが強い魅力をもっていたと考えられるのである。Mr. Crich をこのように ambiguous な理想像として捉えるならば、彼が炭鉱町 Beldover の名士、財産家であるということと考え合わせ、それが Lawrence の現実の父親からはかけ離れた、彼の頭の中の理想的父親像であったとみることができる。名士でありながら名士ぶらず、財産家でありながら自分自身の金を意識しない大様さ、生れの良さは、息子 Gerald にも、彼が炭鉱の一切を合理化し終えた時、生産性の高まった炭鉱に対し、もはや何の興味も持たないという形で引き継がれており、それは、毎日のように両親の間で金銭的な口論がなされるのを見て育った炭坑夫の息子 Lawrence の現実からすれば、遠い憧れの対象であったに違いない。とすれば、Lawrence は、ある意味で現実の父親以上に否定しにくい存在、純粋に近い一つの父親の理想像として Mr. Crich を描き、これと闘ったと言えるだろう。これは、急速な産業化、機械化の波の中で、いつしか人間性を無視され、切り捨てられてゆく古き時代の労働者達が、やがて古めかしい人間味ある炭鉱を懐しみ、その親爺さんであった炭鉱主の寛大さを思い起し理想化し、古き良き時代の英国の夢をふくらませるにも似た、一種の幻想である。こ

のことを、あたかも暗示するかのごとくに、次の Gerald と Birkin のやりとりがかわされる。

“Don’t be too hard on poor old England,” said Gerald. “Though we curse it, we love it really,”

To Ursula there seemed a fund of cynicism in these words.

“We may,” said Birkin. “But it’s a damnably uncomfortable love: like a love for an aged parent who suffers horribly from a complication of diseases, for which there is no hope. (*Women in Love*, p. 445)

父親の理想像、病める理想像としての Mr. Crich は、その背後に現実の父親の不在感を潜ませつつ、それ故に、過ぎし時代の英国の理想、時代精神としての象徴性を色濃くすることになった。逆に言えば、この背後にある父親の不在感こそ、そして不在なる父 gentility と Christian love への憧れこそ、この壮大な文明論とも言える小説を、単なる観念論ならぬ父と子との確執として生み出させた原因でもあったろう。

このように見てきた時、“England, My England” と題する短篇の重要性が浮かびあがってくる。“father,” “fatherhood,” “father-in-law,” “fatherless,” “father’s” といった言葉が、やたらに飛び出してくる、この short story には、父親の理想像としてみることの出来る二人の父親が登場する。そして二人は、相反するタイプの父親であり、互いに婿と舅(father-in-law)という、対立をはらんだ一種の父子関係に置かれている。婿 Egbert は、その結婚に際し、義父の娘に対する権威を、さらには義父の中に受けつがれてきた過去の父親像を否定する存在として現れる。義父 Godfrey Marshall が、

...he was still the father of the old English type. (“England, My Engand,” p. 314)⁴

と、あるように、子供に対し理屈ぬきに強い権力と信頼関係を有する頼もしい父親であり続けるのに対し、Egbert は、

He was himself the living negative of power. (p. 315)

すなわち、全ての権力の否定者だからである。これだけなら、一般的な、あるいは Victoria 朝的な父と子の対立を図式化したともみえる両者の関係に面白さが加わるのは、二人とも、それぞれ父親として、子供らに生きる力を与えうるか否か、その責任を果せるか否かが試されるからである。

そのことに触れる前に、今少し詳細に、二人がどのように理想的な父親像を提示しているのか、同時に、その弱点を見てみよう。古い英国の父親の一つの典型として描かれる Godfrey Marshall は、しかし、*Women in Love* の Mr. Crich 以上に批判しにくい理想的な父親である。彼は、その意志と手腕をもって、家族に何不自由ない暮しを保障し、Hampshire に屋敷をもち、社会で敬意を払われる一応の地位を確立し、家族の相談や信頼にいつでも応える用意をみせながら、決して威圧的な無理解な父親ではない。さらには、物質的栄達を、決して内面の空虚さを埋めるものではないこと、現代社会とそのしくみが、真の生きがいを与えてくれ

ないことにも気付いている——信じがたいほど現代的な認識の持ち主である。

Nevertheless, do not let us imagine that he was a common pusher. He was not. He knew as well as Egbert what disillusion meant. perhaps in his soul he had the same estimation of success. But he had a certain acrid courage, and a certain will-to-power. In his own small circle he would emanate power, the single power of his own blind self. . . . He was too wise to make laws and to domineer in the abstract. But he had kept, and all honour to him, a certain primitive dominion over the souls of his children, the old, almost magic prestige of paternity. (p. 314)

この文章に見出されるほとんど全ての表現は、Godfrey が賢明な非凡な精神の持ち主であり、ニヒリズムの辛酸をなめた上で、なお現実の中から生きるために役立つものを拾い集め、家族のために用立てようとする勇氣ある父親であったと、賞め称えているようである。子供が受けつぐべき価値ある精神を持ち合わせていようといまいと、いたずらに悩むことなく、昔ながらに無意識に子供に働きかける父権に訴えることにより、家族に信頼と安定を与えているのである。その父権は、“magic prestige”——どこか、まやかしくさくもあるが魅力的な、神秘的な力として描かれ、Godfrey の単純な権力欲、世俗的成功への意欲すら、それ自身に大して意味はないとされながらも、彼を生きぬかせる一種、健全な意欲、活力として評価される。それは、

Bit by bit every establishment collapses, unless it is renewed or restored by living hands, all the while. (p. 313)

という現実主義——理屈ではなく今ある現実直面し、生きた手で支え、補修していかなければ生きることさえかなわないという認識の健全さと、自ら、この〈手〉になることに徹し、それに喜びを見出すことの出来た時代への讃美がこめられているように思われる。讃美というより、それは羨望と親近感との入り混った微妙な感情であろう。羨望とは、これでもか、これでもかと理想化する父親像の背後に、それとは程遠い現実、父親の不在感が潜んでいるからだろう。逆に、親近感が感じられるというのは奇妙なようだが、それは Godfrey の父親像を Egbert の父親像と対比した時に現れるのである。

無論、Godfrey の弱点は、彼の内面に潜む“bitterness,”そして敢えて、そのことに目をつむって直進しようとする“blind will”の盲目さ、自らの生きる世界と可能性を自分の手の中に入る“his own small circle”の中に限って、その中に閉じこもってしまう彼の限界である。新しい時代の流れの中で、自分達の生きる道、未来を探し求める子供達が Godfrey の限界に気付かない筈はない。

And they [children], venturing out into the hard white light of our fatherless world, learned to see with the eyes of the world. They learned to criticise their father, even, from some effulgence of worldly white light, to see him as inferior. But this was all very well in the head. The moment they

forgot their tricks of criticism, the old red glow of his authority came over them again. *He was not to be quenched.* (p. 314—italics, mine)

“our fatherless world”——我々が生きている、この父親不在の世界——という表現そのものが登場するこの一節の中に、Godfrey に対する批判と、なお断ち難い彼とのきづな、その魅力が集約されている。

この Godfrey の消し難い魅力は、同時に、そこから脱しきれないという足かせともなる訳だから、そこで、彼の子供達以上に純粹に、“the hard white light of our fatherless world”を象徴する存在として、Godfrey の影響から最も自由な Egbert が登場する。しかも彼は、単なる精神主義者ではない。

And Egbert was a born rose. The age-long breeding had left him with a delightful spontaneous passion. He was not clever, nor even “literary”. No, but the intonation of his voice, and the movement of his supple, handsome body, and the fine texture of his flesh and his hair, the slight arch of his nose, the quickness of his blue eyes would easily take the place of poetry. Winifred loved him, loved him, this southerner, as a higher being. A *higher* being, mind you. Not a deeper. And as for him, he loved her in passion with every fibre of him. (p. 306)

彼こそ新しい時代の人間だ——と、我々が言う時、しばしば宇宙人を見るような驚きをもって彼を眺めるのは、彼と我々とのつながりのうすさを感じ、何かしら共通の意識、共感を抱くことが出来ないと感ずるからだろう。どこか、そうした感じが“born rose”（生れながらのバラ）としての Egbert の描写につきまとう。Egbert は Godfrey 以上に生れの良い、従って、現実への執着や闘いを、当初から知らずに育った美しい者、romantic な夢の中の主人公そのものである。そして、我々が Lawrence と physical passion との強い結びつきを思う時、大いに皮肉なことに、Egbert の魅力は、その肉体の純粹な美しさと、彼の“spontaneous passion”にある。しかし、注意深く見るならば、Lawrence が求めたものと、Egbert の passion の間には、微妙なくらい違いがあるようだ。とはいえ、この違和感は、Egbert の魅力を打ち消すほど圧倒的なものではなく、子供のように純粹な、その美しさに対し、Godfrey とは別な親近感が感じられることも否めない。どうやら Egbert の魅力は、父親としての Godfrey の魅力と対比された時に、“higher being”であって“deeper”ではないことが強調され、その親近感を失うもののようなものである。どうも Egbert も厄介な存在である。

そこで、Lawrence が求めたものと Egbert との微妙な gap に注目してみる時、批評家達が、この作品を Georgian poets への諷刺とみたことにも、少なからぬ意味がある。このような Egbert が、様々な点で、Lawrence と一時、親交のあった Georgian poets との類似を見せ、しかも Egbert が自分の子を育てる立場に立つや父親としての無能さをさらけ出すという筋の展開が見られるからである。そこで一通り、理想化された人物像としての Egbert の特徴を次に挙げてみることにするが、それらが全て、Edward Marsh を中心とする詩人達

Georgians に共通する特徴であったことは、Keith Cushman らの研究⁵に照らして明らかである。

- (1) 洗練された育ちのよさと豊かな感受性。
- (2) 一切の世俗的権威の否定。
- (3) 世間、mob spirit からの自由。
- (4) いかなる団体、権威、主義にも commit しない自由、独立の精神。
- (5) 生きる希望と救いを、英国の伝統的な土地 countryside landscape に求める。

以上のような Egbert の特徴は、次のような弱点をはらみ、それは確かに多くの点で、Georgians の弱点を思わせる。

- (1) 現実感覚の希薄さ。
- (2) 現実直面し、対処する熱意の欠如。
- (3) “a born amateur”——何をやっても中途半端で結局は役に立たない。
- (4) 軽蔑する物質主義者によって、自分や家族の生活を支えられている。
- (5) 現実認識の甘さから、愛する人間や自然に対する理解も観念的で、その恐しさに気づかない。
- (6) 一切の権威、力を否定することによって自らも、何らかの権威を持とうとする情熱を欠く。これは、後述するように、父親としての家族に対する責任の放棄、そして母親としての妻の権威の否定をも意味する。

こうした Egbert の特徴、その魅力と弱点とが微妙に釣りあった状態でみられるのは、彼と妻 Winifred とのロマンティックな新婚生活においてである。しかし、それが決して単なる諷刺的トーンで描かれたものでないことは、次の一節に明らかである。

Wonderful then, those days at Crockham Cottage, the first days, all alone save for the woman who came to work in the mornings. Marvellous days, when she had all his tall, supple, fine-fleshed youth to herself, for herself, and he had her like a ruddy fire into which he could cast himself for rejuvenation. Ah, that it might never end, this passion, this marriage! The flame of their two bodies burnt again into that old cottage, that was haunted already by so much bygone, physical desire. You could not be in the dark room for an hour without the influences coming over you. The hot blood-desire of bygone yeomen, there in this old den where they had lusted and bred for so many generations. The silent house, dark, with thick, timbered walls, and the big black chimney-place, and the sense of secrecy. Dark, with low, little windows, sunk into the earth. Dark, like a lair where strong beasts had lurked and mated, lonely at night and lonely by day, left to themselves and their own intensity for so many generations. It seemed to cast a spell on the two young people. They became different. There was a curious secret glow about

them, a certain slumbering flame hard to understand, that enveloped them both. They too felt that they did not belong to the London world any more. Crockham had changed their blood: the sense of the snakes that lived and slept even in their own garden, in the sun, so that he, going forward with the spade, would see a curious coiled brownish pile on the black soil, which suddenly would start up, hiss, and dazzle rapidly away, hissing. One day Winifred heard the strangest scream from the flower-bed under the low window of the living-room: ah, the strangest scream, like the very soul of the dark past crying aloud. She ran out, and saw a long brown snake on the flower-bed, and in its flat mouth the one hind leg of a frog was striving to escape, and screaming its strange, tiny, bellowing scream. She looked at the snake, and from its sullen flat head it looked at her, obstinately. She gave a cry, and it released the frog and slid angrily away.

That was Crockham. The spear of modern invention had not passed through it, and it lay there secret, primitive, savage as when the Saxons first came. And Egbert and she were caught there, caught out of the world. (pp. 306—307)

Crockham は、言わば、未だ現代文明の手に染まない、都会と野性的自然との境い目に属する土地である。その古い cottage は、原始的で野蛮な Saxons の息吹きを肌感じさせ、Egbert と Winifred が、あたかも現実の世界から脱出したかのような、束の間の夢を可能にする。その夢の不思議な魅力。若い夫婦が、まるでその中では子供のように感じられる暗く (“dark”) 重厚で (“thick”) 神秘的な (“secret”) 雰囲気。その静けさと孤独、緊張感、熱く燃えあがる情熱。この魅力は、単に Cushman が指摘するように Lawrence が Edward Marsh らの自由で感性豊かな人柄と楽天的な考え方にひかれ、一時期 Georgians の影響を受けた、ということにはとどまらず、*Sons and Lovers* における Miriam の農場の魅力が示しているように、幼少時から Lawrence の心を支配した憧れの一つであったに違いない。だからこそ Winifred は Egbert に引きつけられたのであり、父親 Godfrey に代わるべき力として、彼を求めたのであろう。

Perhaps she had expected in him another great authority, a male authority greater, finer than her father's. For having once known the glow of male power, she would not easily turn to the cold white light of feminine independence. She would hunger, hunger all her life for the warmth and shelter of true male strength. (p. 315)

この場面での Winifred の心境は、まさに Lawrence の心境であったのではないかという気がする。ひとたび父親の “male power” を知った Winifred には——という表現は、Lawrence の生い立ちと矛盾するようだが、逆に父親の不在感という形で、それを強烈に意識した Law-

rence にとっては、Egbert をも新しい父親とし、すなわち理想化することが必要であったと考えられる。それは、彼につきまとった一種の “hunger” でもあったろう。従って、Egbert と Georgians との類似性をみる場合には、これを単なる諷刺とか Georgians との訣別とみるだけではなく、少し角度をかえて見る必要がある。Georgians を一つの具体的な父親像とすることにより、その中に Lawrence の理想を追求することによって、彼は初めて自分が求め、かつ闘っている問題を鮮明にすることができた、とみることができる。

しかし、理想化し、父親としたものが、同時に、認識の甘さ、致命的な危険をはらんでいること——それは、すでに上にあげた夢のような Egbert の新婚生活の描写の中にも見られる。Egbert は “a born rose” である。しかし Egbert が花で満ち、romanticize しようとした Crockham の花壇は、その場しのぎの細い板ぎれで支えを作ることしか思い浮かばない “a born amateur” としての Egbert を嘲笑するかのようになり、年を経ず滑り落ちる土の力に屈して押し流されてしまうし、そこには時として恐ろしいヘビが現れ、カエルの足に噛みついて震感とするような叫びをあげさせる。この、ヘビの口からぶら下がっているカエルの足のイメージこそ、Egbert が父親となった時の、子供の運命を暗示しているのである。それは、Godfrey と Egbert という二人の父親が、父親としての存在価値を試される事件であった。或る日、Egbert が、いかにも “born amateur” らしく草刈りの後に放置しておいた鎌の上に、娘の Joyce がつまづいて倒れ、足に深い傷を受ける。さらに、Egbert は、一時は自分の不注意によって娘が怪我したことを妻に責められ、後悔に心を痛めるが、すぐにそれを打ち消すように、娘の傷は表面だけの軽い傷で、大騒ぎしなくても治るのだと主張する。この認識の甘さと、現実を直視しようとしないう逃げ腰が、娘の傷をさらに悪化させることになり、Godfrey Marshall がかけつけて信頼すべき医者と呼び寄せた時には、娘は足を失うかも知れないという状態に陥っていた。この事件の背景には、Egbert がその子らに対し、

He would try, as far as possible, to abstain from influencing his children by assuming any responsibility for them. “A little child should lead them —” His child should lead, then. He would try not to make it go in any direction whatever. (p. 315)

という、徹底した放任主義を実践してきたことがある。それは Godfrey のように賢明に、大きな親の庇護の手の平の中で自由に子供を遊ばせるというのではなく、親自身に現実に対処し子供を守る力が無いのに、その責任を放棄し、恐ろしさを秘めた現実の中に子供を放置するのである。そのことは、新婚当時は何とか、自分の手にした遺産によって夫婦の生活を維持できた Egbert が、子供が生まれるや否や、余分な物入りに対処する経済力を持たず、Godfrey の寛大な援助に頼らねばならなかったことにも表れている。しかし、こうした Egbert の弱点に気づかぬ限り、子供達にとって彼は、この上なく魅力的な父親であったに違いない。しかし、母親となった Winifred にとっては、一切の生活のルールや方針を子供に与えまいとする Egbert の努力は、大きな障害となる。

And then she knew that she must be responsible for it [her child], that she

must have authority over it.

But here Egbert, silently and negatively, stepped in. Silently, negatively, but fatally he neutralized her authority over her children. (p. 315)

Winifred が親としての責任感にめざめた途端、Egbert は彼女の権威を崩壊させる静かな敵となり、夫婦の間に不協和音が生れてくる。そのような背景の下に、Egbert の放置した鎌によって娘が深い傷を追う、というこの事件は、Winifred の目からうろこを落すような意味をもつ。彼女は、新婚時代は一言も夫を非難することはなかったが、今や、あからさまに Egbert の思慮のなさを批判し、怒りに燃える目でにらみつけるからである。

この事件を契機として、Winifred は夫の存在を無視し、何事によらず父親 Godfrey と相談して事を運び、Egbert は、やがて完全に家庭からはじき出されてしまうことになる。娘の足が失われるかも知れないという切迫した事態の中で、必死に娘を救おうとする Winifred と Godfrey の結束は強まり、てきぱきと現実に対処する Godfrey の采配によって、彼らと娘の三人は、もっと徹底した治療の受けられる London の病院へ旅立ってゆくが、Egbert は、ただ独り Crockham に取り残されてなす術もない。やがて苦しい治療、激しい痛みを、わが身に対する拷問のように受けとめる Winifred は、あたかも自分が親としての責任を忘れ、Egbert への愛にうつつを抜かしていたかのように、激しく自分を責め、その愛を焼き切ってしまう。もはや子供への loyalty そのものと化した Winifred は、いかなる肉体的、精神的犠牲もいとわず、Godfrey と共にあらゆる手を尽して娘の足を救おうとするが、彼らの苦痛にも、犠牲にもあづかることの出来ない Egbert は、ますます家族から浮きあがってしまう。娘の長い治療、そのため London に滞在する家族と Crockham にとどまる Egbert との別居生活が続く中で、彼は時折 London の家族を訪れるが、献身的母親と、これに絶対的の忠誠をもって報いようとする娘との強い結束、家庭の中に入ってゆくことができず、単なる訪問者、さらには油断のならない侵入者、“evil force” とみなされるにいたる。これは Winifred が夫への愛、Egbert のもつ “sensual attraction” を、子供への忠誠から彼女の意識をそらそうとする敵とみなし、心ならずも彼女の内にかきたてられる情熱、肉欲を、激しく憎悪し否定するからである。ここに到って、初めて Egbert は、何かしなければ自分の存在そのものが無になると気付く。もはや家族の声の聞かれない Crockham の土地に対する情熱も、色あせてしまった。折しも戦争で、彼は自分も参戦することを思いつき、参戦への意欲も、戦争反対の情熱も湧かぬままに、ずるずると、やがて人々と同様に参戦することになるだろうと感ずる。そして Winifred に相談し、Winifred は父 Godfrey に相談してみよと言ひ、Godfrey は、それが Egbert に出来る唯一の事だろうと述べる。戦争であろうとあるまいと、最後まで現実と自分との関わりを見出せず、自分自身の意志による決定をなし得なかった Egbert は、結局、戦争の中で虫けらのように死んでゆくのである。

この Egbert の皮肉な末路は、彼の中に理想化された physical passion、生きた人間の肉体、英国の土地と自然に向けられた情熱が、現実に照らされ、父親 Godfrey の realism と対置された時にたどる道である。無論、父親の責任とは、ただ目に見える現実に対処し、子供の

身体の安全と生活の安定を与えることだけではなく、そのことは、Godfrey に対する批判に基いて Winifred が Egbert を求めたことによって明らかである。しかし、その Egbert が現実に父親の立場に立ち、Godfrey と対比された時、Egbert の生き方は、真に生きる価値の提示とはならない事が暴露された。むしろ“enduring”な価値、現実の重みに耐えうる持続性のある価値、という点では Godfrey の方がましであった、ということになる。こうした二人の父親像の対比を通して、Lawrence にとって父親とは何であったか、が判る。それは、何よりも、＜子供に対する生きる価値の提示＞という責任を負うものであった。この父親の責任は、父親の生き方、ここでは Egbert という理想像が現実の嵐に耐えうるかどうかによって試される。この嵐は社会の中にも、自然の中にも身を伏せ、牙を向いている、という意識は、この父親としての責任にめざめた時に生ずるものだろう。そして、この責任感のない、生半かな自然讃美は、結局は存在を減すことが語られているようだ。

Cushman は主張する。1908年前後、H. G. Wells らの realism の作品に傾倒し、もはや減^{たん}ぶはかはない英国の現実を見つめて暗澹たる気分^{たん}に陥っていた Lawrence は、その時代全体が欲し、歓迎したように、1910年から1915年にかけて Georgian poets の楽天的で自由な考え方、生き方に引かれ、その再生力に望みをもったのだと。さらには、しかし Georgians の生半かな自然讃美に気づき、戦争に対する彼らの消極的協力、ないしは虚無的参戦を目にして、彼らと訣別したのだと。Lawrence がいつ、どのような本を読んだか、いつ、誰と接触したか、といった事実の調査に基く、この主張は大いに説得力をもつ。確かに Georgians が、現実の一つの父親像を与えたであろうことを踏まえた上で、しかし、それだけではなく、Lawrence の心の中には、そもそも夢を追理想を求める romanticism と、これを現実に照らす realism とが存在していた、と見るべきだろう。彼を引きつけた肉体、無意識、自然への憧れを Lawrence は理想化せずにはいられなかったが、しかも、それを＜父親＞という ambiguous なイメージとして理想化することによって、現実に照らさずにはいられなかった。そこに、幼い Lawrence が常に身近に感じていた父親の不在感、父親 Lawrence が家族に対する責任を果していない、現実から逃避している、とする意識が強く作用していたと思われる。

以上のように、“England My England”において、Lawrence は肉体、自然への情熱を理想化し、理想化された＜父親＞という ambiguous なイメージの中に置くことによって、それを現実と、そして彼の中のもう一つの欲求である realism と対置した。そして、それによって生半かな自然への讃美を脱皮し、“inhuman”, “impersonal”な自然、人間、という彼独自の文学の世界を切り開いていったと思われる。

その、もう一つの欲求である realism は、Godfrey という父親像によって示されるように、単なる机上の realism ではなく、日々の生活に密着した感覚であったことが伺える。ここに思い出されるのは、*Sons and Lovers* であり、二人の女性が Leivers 家の台所でイモを煮ている場面である。家の中の細々とした仕事の一つ一つに完全性を求め、これを果せないという罪悪感を極度に強調する主婦 Mrs. Leivers。限られた生活の場の外に夢を追う Miriam。イモが焦げたか焦げないかをめぐる、その場のピリピリとした緊張感に息苦しくなった Paul Morel

が、これを女達の“religious passion”常識を外れた理想主義的情熱と感じ、彼自身がこの家でなく Morel 家で育ったこと、現実的な“reserve”(抑制)をもった Mrs. Morel という母親に育てられたことを感謝する、という記述もまた、Lawrence の現実的感覚を裏書きするものだろう。いかに Mrs. Morel が、Mr. Morel と対比して精神的な女性であろうと、それは、芸術よりも現実の生活を重んずる精神であった。同様に Lawrence の育った環境も、いわゆる文学的環境ではなく、当時の upper-middle class 出身の作家達と異なり、彼は肌で生活の現実感を知っていたのであろう。その現実感、単に Mrs. Morel だけでなく、父親 Mr. Morel も属するところの世界である。ただ Mr. Morel は、その中の迷える小羊のような、気弱く未熟な、そして温かい人間像であった。この Mr. Morel に欠けていたもの——言わば、不在なる父、父親の理想、父親としての責任感——をふくらませば、Godfrey Marshall になると言ってもよいだろう。

このように、Egbert と Godfrey という二人の父親像の対比は、Lawrence の他の作品にも共通する〈父親〉という image の ambiguous な働きを明らかにする。この二人は、それぞれに ambiguous な父親像であり、それぞれに対する憧れと反発をはらんでいる。しかし、その二つの像が対比されることによって、その中に秘められた二つのモーメント、憧れと抑制、romanticism と realism が、はっきりと表にあらわれるのだ。理想を追求しようとする憧れが強ければ強いほど、これを否定する realism も強められねばならなかった。最初にあげた Lawrence の主な作品の中の父親像とも照らし合わせて、この二つのモーメントは、父親の不在感によって高められたと考えられる。このように、その底にある父親の不在感を探求し、Lawrence 文学の中に様々な形で現れる ambiguous な父親像を、さらに究明する上で、この作品は重要な足がかりを与えてくれる。

註

1. D. H. Lawrence, *Sons and Lovers* (Penguin Books: Harmondsworth, 1948).
2. D. H. Lawrence, *The Rainbow* (Penguin Books: Harmondsworth, 1949).
3. D. H. Lawrence, *Women in Love* (Penguin Books: Harmondsworth, 1960).
4. D. H. Lawrence, “England, My England,” *The Complete Short Stories*, Vol. II (Heinemann: London, 1955). 同作品については、この後、引用後に () に入れて頁番号のみ記載する。
5. c. f. Keith Cushman, *D. H. Lawrence at Work: The Emergence of The Prussian Officer Stories* (The Harvester Press: Hassocks, 1978).

この論文は、1983年度研究所総合研究助成を受けた「英国小説における『父と子』」と題する研究の一環として書かれたものである。松村昌家教授をはじめ、同研究の共同研究者諸氏から、討議の場で貴重な助言、啓発を与えられたことを感謝する。

原稿受理 1983年12月9日